

〈韓国と北欧の学校図書館見学記〉

英語初級者から見た IFLA 年次大会

真 鍋 由 比

IFLA の年次大会には学生の頃から憧れていた。JLA の図書館雑誌の広告をみて、世界中の司書が集まって図書館の話をする……夢のようだと思っていた。それで、昨年韓国大会に参加する数年前、2002年にグラスゴーで IFLA の年次大会が行われたとき、グラスゴーなら「少なくとも英語だ！」と思い、大英図書館見たさも手伝ってミーハー丸出しでよくわからないまま参加した。

1. IFLA 年次大会とは

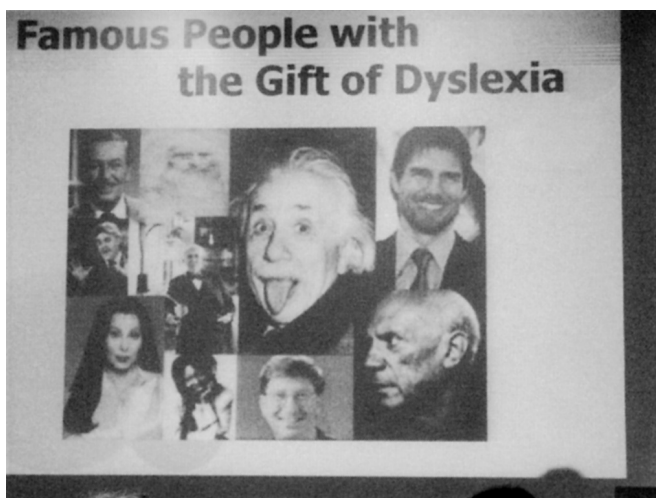
IFLA（国際図書館連盟）は、1927年に英国エジンバラで結成された国際的な NGO。現在の会員は各国の図書館協会、国立図書館、図書館関連団体など 150ヶ国の1700機関で構成されている。発足以来毎年、年次大会を行っている。参加しているのは図書館関係の管理職が多く、全体的に年齢は高め。その国まで行く交通費、高い会費が支払えなくてはいけないので（学生には配慮されているが）、若い現場の職員が参加しているのは少ないと思われる。公共図書館・大学図書館・専門図書館が中心で、学校図書館は小さい扱いだっただが面白かった。

今年は隣国韓国での大会。活字が仏教の経典を印刷するためにグーテンベルグよりも早く発明されていたと得意気にオープニング・セレモニーで主張していたが、それよりも児童図書館の数がこの10年で爆発的に増えたことのほうが驚きだった。金大中元大統領のスピーチも（おかげでセキュリティが厳しくて、パスポートを見せないと入場できなかったが）、CD 付のテーマソングも、司書は未来を照らす、図書館こそが知的格差を是正して社会の問題（貧困や戦争）を解決するんだ、とかなり良いことづくめで気恥ずかしいくらいだった。が、国を挙げてこの IFLA 大会を盛り上げていて、北欧とともに

に世界で一番のインターネットの接続速度と普及率をほこる IT 先進国である勢いも垣間見えた。

IFLA 年次大会期間中は展示会パーティ、首相のガラレセプション、文化の夕べ（これに参加するとき、司書の乗ったバスの両側をバイクが護衛していて、VIP 気分満喫だった）、市長のレセプションと連日イベントがあって、夕食を食べ損ねることはなかった。インターネットカフェも展示会場にあり、母国との連絡を取り合う参加者でにぎわっていた。私はハングル文字が全く読めなかったので、憶えている限りのウィンドウズのアイコンをクリックして日本語をインストールして使っていた。

各セッション（分科会）の発表を聞きに行くことがこの大会に参加する主な意義の一つだろう。分類、子どもと YA の読書、書誌、保存、マルチメディア、韓国大会ならではの系図学、著作権、レファレンス、目録、図書館施設、情報リテラシーなど様々な分科会があって興味のあるものが同じ時間帯にあったりすると本当に残念。あらかじめ HP で発表されているセッションの時間帯をチェックして、自分の興味のある 1 日だけ参加するという手もある。YA・児童サービスのセッションではおばあちゃんとトラの物語の実演があったり、甘くないあずき粥が振舞われたりした。韓国のおばあちゃんがこどもに物語



を聞かせるシステム（研修）、北欧の読み聞かせカー、ディスレクシア、AIDSの啓発キット、イスラムに対する差別発言（表現の自由）に対するディベートなど実にさまざまな話題が話し合わせ、図書館業務の多様性と奥深さを感じた。アフリカの国でフランス語を教え、その業績について発表している神父に、ネイティブの文化啓蒙はどうかと質問した女性に同感だ、と思いつつ自らの英語力の貧困さと度胸のなさがあいまって心の中だけで拍手していた。DAISYが日本生まれの技術だということは知っていたが、韓国の各種セッションでもひっぱりだこだった。ギリシャの発表でレファレンスをマーケティングして、博物館などと連携して対応している話も面白かった。座って聞いているだけで精一杯だった。あまりにも多くのセッションがあるので大会全体の把握はとても無理。興味のあるところだけ、かいつまんで動かないと身が持たない。セッションには一日だけ参加して、それ以外の日はずっと自分でアポをとって韓国の図書館をまわっていたというツワモノもいた。

図書館ツアーは図書館の種類別にある。国会図書館の参加者はそれだけで出口が満杯になるくらい多かった。学校図書館のツアーは3つあったが、バスで行くのが申し訳ないくらい少なかった。（だいたいいつも一日に集中している）

展示会場にポスター・セッションの場所がある。数日間、決められた時間帯に自分の研究発表をポスターの横に立ってプレゼンするので、事前に募集し選考があるので、筑波大学から参加された松戸宏予さんの



発表が学校図書館司書と養護教諭ほかの連携に関するもので興味深かった。ずっとポスターの横に立ち、興味のある人に話しかけるのは内向的な人間にはかなり精神力が必要なのでは、と思われた（最優秀賞は台北におけるホームレスの公共図書館利用）。

2. グラスゴー大会の思い出（2002）

グラスゴー大会のときはBM（Book Mobile）がヨーロッパ各地から会場に大集合して壮観だった。展示会場に児童図書館のモデルコーナーがあって、展示やイスの配置などに工夫があった。ポスターもただ平面に貼るのではなく、膨らみを持たせて、自由に貼っていた。読み聞かせの実演もあり、さすが演劇で有名な国、衣装を着た役者さん（？）の声の出し方やリズムが美しかった。開会式にはノーベル賞受賞者のシェイマス・ヒーニーのスピーチがあり、作家アン・ファインの講演もあった。英文学専攻者にはラッキー！

YAのセッションでのコロンビアの女性の発表が印象に残っている。学校の教員たちへのシステム研修や、子どもが学校に来れなくても本を保護者の職場にまでとどける、といった発表だったと思う。その年のIFLA賞を受賞していた。

グラスゴーの公立高校（中流レベル）を二校、図書館ツアーで見ることができた。どちらも一万冊前後の蔵書。レファレンスはどうしているのか、と聞くとインターネットがあるでしょ、という答え。インターネットに関しては行政側でネットが組まれていて、学校用にはフィルターもかかっている。進路指導室がどちらの学校も図書館内に設置されていて、司書とは別にカウンセラーが常駐していた。キャリアガイダンスに力を入れているようだった。雑誌もあまりなかったが、感心したのはわりと新しい映画のビデオなどが揃っていた。司書に貸出統計を見せてほしいというと、どちらの学校も統計は作成していなかった。理科の教員がどうやって図書館を使うか、丁寧に学年別のスケジュール表を見せてくれた。授業でもきちんと使われているようだ。どちらも専任が1人勤務。

3. 韓国の学校図書館

IFLA ソウル大会の図書館ツアーで信聖高等学校東泉図書館 (Shin Sung High School Dong-Chun Library) <http://shinsung.hs.kr> を見学した。

1997年開館。プロテスタントのミッションスクールで私立の男子校。2001年京畿道教育庁 (Gyeonggi Provincial Office of Education) から情報化善導学校 (Best Information School library) として表彰された。開館時間 8 : 30~18 : 00 土 8 : 30~13 : 30、司書は専任、女性 2 人 (男子校であるせいか、教員はほとんど男性だった) 1 日 300~400 冊の貸出がある。閲覧席は 900 席あって (4 階まである。見学できたのは 2 階まで) 国立中央図書館と同じ BDS 使用。図書資料は 50,154 冊、非図書資料 6,086 (2006 年 8 月現在) 雑誌は 24 タイトル、新聞は 8 誌。生徒は一人 3 冊 1 週間 (高校生は 4 冊) で、生徒は延滞料 1 日 500 ウォン (60 円くらい) 年間予算は 5000 万ウォン (約 615 万円)。生徒数は高校 1500 人、中学 1300 人、図書館ボランティア (日本で言う図書委員) は 45 人で指導は司書が担当。新入生にはパワーポイントでオリエンテーションしている。選書は館長 (教員) と司書 2 人で行い、生徒や教員のリクエストが中心。

校長以下理事など役員や係教諭全員、固い握手で歓迎してくれた。日本映画のビデオも結構あった。著作権の関係で、日本では学校図書館では貸出できないという、授業で使うだけ、とのこと。でも第 2、第 4 土曜日にはその最新 DVD で上映会をする。夏休み期間も開館していて、生徒の制作したショート・フィルム・フェスティバルを行っている。面白いのは毎週水曜日、読書クイズ (Book Treasure Hunt) をやっていて、司書がとある本の 1 ページをコピーして図書館内に掲示する。どれがその本なのか、当てて探してカウンターに持ってきた生徒先着 1 名が賞品 (図書券 500 円くらい) をもらえるらしい。美術、社会、地理、韓国語、科学などの授業で図書館を利用させ、調べ学習を実施している。保護者の方の読書クラスも月に 1 回、図書館で行われている。これは他の学校でも行われているようで韓国は本当に教育熱心だという印象を持った。保護者の読書意欲があると、子どもである生徒に影響するので、図書館を有効に使っている面も含めていい案だと思う。夏休みなど長期休暇中も開館していて、司書の方はたいへんですねという、生徒が

来ているんだから開けなきゃと教員の方が当たり前のように答えていた。

こっそり司書の方に教員との連携って難しくないかと聞くと、たいへんだと英語で答えてくれた。立場が違くと「協働」が難しいのはどこも同じようだ（彼女は英語だけでなく日本語もできて、メールでは両方で返答してくれた）。この高校から立命館大学に何人か入学していて、日本語も勉強させている。悩みは読書数が年々減っているということ。入試のための勉強なので読書はあまりしない。日本でも映画やテレビドラマ化した本くらいしか読まないと話すといずれも同じだという反応。

韓国の公立学校の司書が IFLA ボランティアをやっていて（今回ボランティアが大活躍した大会で2000人くらいいたらしい）、話をする機会があったのだが、その人によれば、国立の高校では校長との交渉で、彼女の所は夏休みは開館しないことになったが、他の人はそうでもないらしい。教員と同じ **national exam** を受けて同じ給与なのに、教員は夏休みは休みで司書は出勤というのは不公平だ。でも同時に生徒のために開きたい気持ちもある、と言っていた。イギリスの学校図書館でも夏休みは司書は6週間休み、でも教師はもっと長いと言っていた。開館して直接的なサービスの向上をめざすのか、休み中は閉館、ただし休暇中には研修などを受け、研鑽を積んでより専門的なサービスをめざすのか。長期的な視野での、他部署からの理解と協力が必要だと思う。ほかの参加者からは、韓国では（上流階級だろうけど）高校でアメリカに留学して英語を身につけていい大学に行く生徒も多いと聞いた。韓国でも格差社会は進行しているようだ。

今回の IFLA で直接盗めるようなテクニックはなかったが、インスピレーションはあった。母親の読書教室など洗練されてはいなくても、韓国の取り組みは意欲にあふれていた。学校図書館に関しては日本より遅れていると彼らは思っているようだが、国ぐるみで図書館を発展させようという意気込みは、いずれ遠からぬ未来、追い抜かれるだろうと思わずにいられなかった。

4. IFLA 大会に参加して：まとめ

館種が違ってても普遍的な問題はある。セッションでは図書館活動においてさまざまな習熟度の発表があったが、後進国でも細かい配慮でよく練られた

活動をしている発表は勉強になったし、先進国でも単なるデータ分析などは正直興味が持てなかった。発表原稿はネット上にアップされていて誰でも見ることができるので、会場に参加するのは、生の図書館を見て、生の人間に会い、インスピレーションを受け、お互いのモチベーションを高めるためだと言えよう。実際に外国にいて違う文化を体験でき、図書館の情報を共有できる、空気も味も雰囲気も！先述の韓国の学校司書は夜間大学院にこの9月から通うらしく、私も来年4月から夜間大学院で学校図書館について研究するつもりだというと、一緒に頑張ろうということになり、メールのやりとりを続けている。

靖国神社に小泉首相が参拝したあとだったので反日感情を心配していたが、韓国人はとても親切でいやな目には遭わなかった。ちょっと前の日本の田舎で味わうようなホスピタリティを感じた。

来年は南アフリカのダーバン。ヨーロッパ主体なので他の大陸に行くことが少ない IFLA 大会としては珍しい。閉会式でアフリカの子どもたちが楽器のセッションしてくれたのを見て、また行きたくなってしまった。とりあえず、質疑応答できるくらいの英語力と度胸を身につけてから、の話だが。

(まなべ ゆい。松蔭中学校・高等学校図書館司書)